

# とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

事務局(連絡先) 〒277-0014 千葉県柏市東3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会  
\*\*\*\*\*天利武人(教会牧師) 電話 04-7164-9159  
(会報編集、ホームページの連絡先) 〒270-1406 千葉県白井市中205 小林正継  
\*\*\*\*\* Eメール [kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com) 携帯電話 09061674553

☆ 第 24 号  
☆2022年(令和4年)  
2月1日 発行

## ★ 2021の生家の墓前礼拝の報告

今回もコロナウイルスのため茶の花忌の集まりは中止になり、親族中心の墓前礼拝のみ行われました。昨年と同じく牧野信次牧師が司式し、重吉愛唱歌をうたった後に、詩篇4:1~11を読みあげ、また牧野氏所有の雑誌『福音と世界』1959年10月号に掲載された八木重吉の秋の詩を紹介し、感話をしてくださいました。

〈響き〉(秋はあかるくなりきた／この明るさの奥の方に／しずかな響きがあるようにおもわれる)という詩の最後の行に、「しずかな響き」という言葉が有りますが、〈素朴な琴〉でも「琴はしずかになりいだすだろう」と表現しており、心の奥のしずけさを捉える信仰を、重吉はもっていたと語られました。

この日は、牧野牧師夫妻と子息、友人の今村氏、苅部氏、生家の佐藤ひろ子氏と子息の八木明男氏、ひろ子氏の同窓生の佐藤氏、それに私が参加しました。また毎日新聞の記者小国綾子氏が取材を兼ねて参加しました。(小国氏の記事はこの号に掲載してあります。)



## ★まちチャレ講座「町田の詩人、こころの詩人八木重吉をもっと知ろう」が開催されました。

昨年の秋は、町田市生涯学習センターの主催で、八木重吉をテーマに5回シリーズの講座が開かれました。八木重吉に特化したサークルは、まだ町田にはありませんが、町田市や町田市民が八木重吉を取り上げて活動する事は素晴らしいことです。2016年に町田市民文学館主催で「八木重吉展—さいわいの詩人」が開かれていますので、定期的に市をあげてのイベントが続く事が八木重吉記念館を支える事にもなりますので嬉しい事です。講座の概要は以下の通りでした。

### ① 10月6日(水) 13:30~15:30

八木重吉の詩を通して29年の人生を知る  
町田市民文学館学芸員 神林由貴子氏

### ② 10月13日(水) 13:30~15:30

詩人八木重吉と故郷相原の風土—古代天皇家との  
関りにふれて 関東学研究会幹事 松本司氏  
相原保全会代表理事 松日楽正敏氏

### ③ 10月20日(水) 12:50~16:30

横浜線相原駅改札前集合 相原の八木重吉記念館訪問  
八木重吉記念館佐藤ひろ子氏  
案内 八木重吉愛好者 苅部幹央氏

### ④ 10月27日(水) 13:30~15:30

八木重吉の詩の朗読を聞く(語りよみ 五十葉舎) 参加者と一緒に朗読(指導 ちえの環グループ)

### ⑤ 11月10日(水) 13:30~15:30

八木重吉の詩と花を色紙に描く(指導 〈探・探会〉会員)

町田市生涯学習センター市民提案型事業 講座づくり

## ★まちチャレ

講演・体験講座

### 町田の詩人 こころの詩人 八木重吉

をもっと知ろう

町田市相原で生まれ育った八木重吉。その生まれ育った相原の地と詩の関わり等を知る。若い方、子育て中の方、詩の愛好家等どなたでも相原の方にご参加いただきたい。「詩の朗読」や、色紙に「詩と花」を描く体験もあります。

日時：10月6日・13日・20日・27日(全水曜日)  
11月10日(水曜日)  
13時30分~15時30分

会場：堺市民センターホール  
★八木重吉記念館(10月20日のみ)

対象：興味のある方どなたでも  
定員：30名(先着順)  
費用：無料  
★11月10日は材料費等実費がかかります。

申し込み方法：電話 042-728-0071(生涯学習センター)  
9月2日午前9時から受け付けします。

●主催 町田市生涯学習センター  
●企画 探・探会

茶の花忌で司会をしてくださっている青木幸雄さんが企画に関わっており、③の記念館の案内は、熱心な愛好者の荻部幹央さんがして下さいました。その荻部さんから、このまちチャレ講座のプログラムのコピーをいただきました。②の講座の資料を見て、地元ならではの講演内容だったことを知り、新しい目を開かれました。ふるさとへの重吉の愛着は、単なる望郷の思いだけではないという分析です。相原町に生まれた重吉は、日本人の伝統を背負って生れて来ており、重吉が英語や英文学さらにキリスト教入信を通して西欧文化を深く吸収したにもかかわらず、日本人の感性を失わず、日本人の心に響く詩を残せたのは、さかのぼれば天皇にも通じるつながりをもっている家系であること、また内村鑑三に惹かれたのも、日本人の特性を維持したままキリスト教の真理を捉えるという重吉独自の資質があったからだという見方が新鮮です。

### ★忠生図書館の図書館講座「ふるさとを愛した詩人八木重吉」案内

3年半前の2018年7月に町田市の小山田桜台にある詩碑「素朴な琴」を見学した後、忠生図書館で「心の詩人八木重吉の魅力」という題で小林が講演しましたが、再び講演依頼があり、来月の2月25日(金)の午後に「ふるさとを愛した詩人八木重吉」という演題で話すことが決まりました。



オミクロン株の感染拡大で第6波に入っているのが、長引けばもちろん中止もあり得ますが、一応実施する見込みで計画が進行中です。前回同様、午前中に詩碑見学も入れた計画にしようと思っています。市民文学館(愛称「ことばらんど」)や堺市民センター、さらに忠生図書館と町田市の各地で八木重吉についての行事がもたれることは、素晴らしいことです。愛好会としての詳細はこれからですが、概要としては、

町田駅集合→バス→小山田桜台(詩碑見学)→バス→忠生(昼食)→徒歩→忠生図書館(講演)→バス→町田駅の流れで考えています。

コロナウイルスの関係で講演では参加人数制限がありますので、参加希望者は小林まで2月中旬までに連絡して下さい。図書館独自に地元の人々に案内を出しており、重吉の詩の朗読グループも参加予定になっています。

### ★新聞記事の紹介

昨年10月に読売新聞に2回、11月に毎日新聞に2回八木重吉関係の記事が掲載されましたので紹介します。

#### 読売新聞の編集手帳↓

**編集手帳**  
大正期の詩人、八木重吉に「お化け」という詩がある。意外なことに、季節は冬である。△冬は／夜になると／うつすらした気持になる／お化けでも出そうなきがしてくる。たしかに、日差しや樹木が衰え、生命の色が薄まるこれからの時期がしっくりくる。◆平安時代の人は、鬼をはじめ妖怪たちが夜の通りを練り歩くと信じた。その怪異な行列「百鬼夜行」の西洋版といえるハロウィーンに街はにぎわう。◆感染症の下、仮装行列の魔女たちも昨年はなりを潜めたが、今年は各地で元気が

戻りつつある。東京都昭島市の商業施設は先日、背丈2.4近いお化けを展示し、その用意周到ぶりが話題になった。◆カボチャ顔が羽織る黒マントのすき間にぞく胴体は、モミの木でできている。お化けはハロウィーンを堪能したあと服を脱ぎ、次はクリスマスの装飾を身にまとうという。マントの下から気の早いサンタが訪問を予告しているように胸躍る。◆会社勤めの方のなかには明日から冬の装いとなり、今頃ネクタイの埃を払うお父さんもいるに違いない。お化けも人も衣替えの季節である。さて、政治はどうなるかしら。

**編集手帳**  
病に伏して多くの詩を書いた八木重吉に、「皎皎」とのぼつてゆきたい」と題する詩がある。△そして君のところがあまりにもつよく説きがたく消しがたくかなしさにうづく日なら。◆谷川俊太郎さんはこの一節について、「く」の積み重ねが切迫した感情を伝えていると解説している。「声でたのしむ 美しい日本の詩」岩波文庫別冊)。感情とはむろん、詩のなかにある悲しみのことだろう。◆宮内庁の発表に、秋篠宮家の長女眞子さまの「く」が連なっただろう悲しみの日々を思

った。複雑性PTSDと診断される状態にあるという。◆26日に結婚され、その日はお相手の小室圭さんとともに記者会見に臨まれる。心の不調を押しつけて国民の前に出ようとされるのは、結婚と新生活への思いゆえにほかならない。会見を幸せへの転換点にすべく、踏ん張ってもらいたいのは小室さんである。これまでのあれこれを、多くの国民が理解できるよう言葉を尽くせばいい。◆重吉が「皎皎とのぼつてゆきたい」と書いたその場所は、丘へと続くどこかの坂道らしい。皎皎とは、月の光の明るさを言う時によく使われる。



## ★八木重吉について書かれた文章の紹介（金野実加枝さんより提供）

### 重吉の妻なりし今のわが妻よ

末盛千枝子

キリスト教に根ざした美しい詩をたくさん書いた八木重吉、彼は三十歳になるかならないかで亡くなっています。そして吉野秀雄という、またたいへん優れた歌人がおりました。吉野秀雄は、戦後、奥さんが結核で亡くなっています。奥さんも歌人で、彼女が亡くなる頃のふたりのやり取りの歌には鬼気迫る素晴らしいものがあります。吉野秀雄が鎌倉に住み、4人も子供がいて、自分も結核で、歌を詠んで、という生活をしていたときに、だれかの紹介で、未亡人になってからもうだいぶん経っている八木重吉の奥さんが、今でいえばお手伝いさんですが、住み込みで子どもたちの世話をするためにやってきました。この八木重吉の奥さんだった登美子という人は、夫の死後、あっという間にふたりの子どもに死なれ、天涯孤独になり、どこへ行くにも八木重吉の原稿だけは持っていたということです。ずっと裁縫や事務員の仕事をして暮らしていました。八木重吉という人の詩は、いろいろなところにメモみたいに書きなぐったものがばらばら残っているだけで、少し雑誌に発表されたことがあったくらいで、本にはなっていませんでした。その亡くなった夫の詩の書きかけや原稿を大切にバスケットに入れて、吉野家にやって来たのです。

登美子は、やがて吉野秀雄と再婚することになります。そこで素晴らしいのは、吉野秀雄の子どもたちが、ずっと自分たちの面倒を見てくれる新しいお母さんの前のご主人である八木重吉の詩を全部集めて、詩集にしたことです。もちろん吉野秀雄も手伝って、子どもたちと一緒につくりました。結婚するときに、吉野秀雄が登美子に誓いとして贈った歌があります。

わが胸の底ひに汝の恃むべき清き泉のなしとせなくに

これは「私の心の底にあなたが頼みにすると言ってくれる清い泉が本当にありますように」という歌です。素晴らしい歌だと思います。本当にすごいなと思います。吉野秀雄とその子どもたちのおかげで、今、私たちは八木重吉の詩を読むことが出来る。それは本当に素晴らしいことだと思います。今では、吉野秀雄より八木重吉の方が、知られていると思います。

重吉の妻なりしいまのわが妻よためらはずその墓に手を置け

これは吉野秀雄が、八木重吉の実家でいとなまれた重吉の25周年忌に登美子とともに列席したときに、登美子に贈った歌です。これほど素晴らしい友情があるのでしょうか。

『現代企画室』2010年初版「人生に大切なことはすべて絵本から教わった」より

### \*下線部について（小林注釈）

これは誤りで重吉自選の『秋の瞳』と『貧しき信徒』の他、山雅房版『八木重吉詩集』（昭和17年）創元社版『八木重吉詩集』（昭和23年）新教出版社版『神を呼ぼう』（昭和25年）が出版されており、吉野家で編集した詩集は『定本八木重吉詩集』（昭和33年）で、それまででは最も集大成した詩集となりました。

## ★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

（募集） 題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」（この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。）

字数：2000字程度（原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎）

締切：なし（随時お送りください）

送り先：メール（[kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com)へ）か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

「4集まで作成して来て5集目がなかなか作成できませんが、そのうち1冊にまとめたいと思っています。」

### ★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> （作成途中の部分があることをご了解下さい）

Eメールアドレス [kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com) （管理者小林正継）

八木重吉の詩を愛好する会のまとめ、「八木重吉との出会いとその詩の魅力」のまとめなど、コロナウイルスで活動が制限される時期だからこそやっておきたいと思いながらも遅れています。会報も遅れましたが、やっと24号を出すことが出来ました。情報をくださった方々に感謝しています。オミクロン株の収束を祈ります。（小林）